2033

家庭用護身用具

Household Self-Defense Tool

AD 39　山城　將嗣
指導教員　島津　豊

1.研究目的

日本ではここ数年で空き巣や押し込み、居空き等といった家宅侵入による犯罪が増加している。ニュースや新聞を見ていても、何かと物騒な事件が多い昨今、家宅侵入犯罪の対象として最も多い一般家庭において、侵入者等から身を守るための新しい道具を提案する。

2.調査と分析

・家宅侵入による犯罪の傾向

▶家宅侵入による犯罪は視認性が低い夜間、住人が就寝中のところを狙う“居空き”という種類の窃盗が最も多く、全体の七割を占める。住民と遭遇する危険性も高い。

・既存の護身用具

▶防犯ブザーは、多くの場合が周囲からイタズラや誤作動だと認識されてしまったり、周囲の関心も低いというのが現状で、効果は期待できない。

▶既存の護身用具の中では、相手と距離を置ける催涙スプレーが主流であるが、狭い室内で使用するとガスが充満し、残留するため、使用者もダメージを受ける危険がある。

▶スタンガンなどの電気ショックを用いた物も護身用具として多く存在するが、これらは故障や誤作動の危険性を孕んでいる。

・考察

以上のことから、コンパクトで高い威力を持った護身用具になるほど、扱う側にも危険性を伴うことが分かった。制作にあたり、使用者に危険を及ぼすものは避けたい。

3.コンセプトの立案

▶故障や誤作動の危険があるため、仕掛けを使ったものは避ける。

▶相手と距離をとるために、長い棒状のもので、威嚇性の高い形にする。

▶先端は相手に掴まれて持って行かれないような形にし、柄の部分はしっかり持って扱える形にする。

▶狭い室内で長い棒状のものは振り回せないので、動作を“突き”のみに限定する。また、持ち手が突きやすい形にし、相手に先端部分を掴まれた際、素早く引ける形にする。

4.デザイン展開

試作品にて制作と検証を繰り返したところ、防御性を高めるために先端を広がった形にすると、バランスの関係から扱いづらくなることが分かった。また、バランスを考慮して、全体的に重量を分散させる形にすると、今度は扱いづらくなるどころか、人によっては保持するのもやっと、というものになってしまう。

結果、最終モデル制作にあたっては、スリムな形にすることが加えて求められた。

5.完成図

6.結論

今回の卒業研究のテーマとして扱った護身用具は“なるべく多くの人が使いやすく”というデザインの基本概念を意識した形と機能にすればするほどコンパクトで攻撃力の高いものになってしまい、やっていてジレンマを感じた。

結局、実際に持った人の多くが「これでは相手を必要以上に傷つけ、過剰防衛になってしまう」という印象を持っていたので、コンセプトを満たしたものにはならなかった。今回のテーマの難しさを実感した。

7.参考文献

▶警視庁
（www.keishicho.metro.tokyo.jp）

▶日本防犯装備協会
（homepage2.nifty.com/jpea/index.html）

▶ホイス　グレイシー『セルフディフェンステクニック』新紀元社